

# 大津市石居地区水害履歴マップ その①

(平成 29 年 10 月 12 日 石居町自治会館で行った聞き取り調査と平成 29 年 11 月 12 日 石居町自治会館で行った災害図上訓練 (DIG) における参加者の発言に基づき作成)

## 地域特性 及び 昭和 28 年多羅尾豪雨 (8 月 15 日) ・ 台風 13 号 (9 月 23 日) ・ 昭和 20 年代 ~50 年代 の被害状況

凡例	河川および水路・池	昭和 28 年浸水範囲
避難所及びランドマーク	土砂災害特別警戒区域	× ウィークポイント
		× かつての被害箇所
		← 水の流れる方向

—昭和 28 年多羅尾豪雨・台風 13 号の概要—  
 8 月 14 日夜半から翌 15 日朝 5 時頃まで、大戸川上流の山間部一帯で 300mm を超える集中豪雨となり、大戸川が急速に増水した (多羅尾豪雨)。その約 1 カ月後の 9 月 23 日に発生した台風 13 号では、平地から山間部にかけて 200mm 以上の大雨が降り、多羅尾豪雨による堤防補強工事の完成を見る間もなく、随所で氾濫・決壊が続出した。  
 (出典:『滋賀県災害誌 第 1 部』pp.59-62, 1966 年)  
 石居地区を含む下田上村では、多羅尾豪雨の際には上流部ほど雨量は多くなかったものの、上流に降った雨の影響で大戸川が破堤した。台風 13 号の際には、下田上村でも多くの雨が降った。

—昭和 28 年当時の地区の様子—  
 現在の石居 3 丁目のあたりには、まだ家屋が無かった。  
 —石居 3 丁目のウィークポイント①—  
 3 丁目内の側溝を流れる水は、全てここから大戸川へ排水されるため、溢れやすい。

—昭和 28 年当時の地区の様子—  
 昭和 28 年当時は永久橋ではなく、一本橋と呼ばれる板を渡しただけの橋であった。南部衛生プラントが昭和 30 年代に建設されたのにもない、現在のような栗葉橋が建設された。

—石居 3 丁目のウィークポイント②—  
 この辺りは浸水速度が早く、避難する際に通れなくなる可能性がある。

—昭和 28 年当時の地区の様子—  
 当時の大戸川は時間降水量 50mm 程度を想定した設計であった。

—昭和 28 年当時の地区の様子—  
 石居付近の大戸川右岸側には堤防上には道路は無く、堂方向へ至る小径のみであった。

—昭和 20 年代水害—  
 不動道が川になってしまうほど降雨が激しかった時に、道をせき止めて小流に水を流したことがある。

—昭和 28 年当時の地区の様子—  
 当時このあたりは湿地や田んぼで、建物はまだなかった。

—石居 1 丁目のウィークポイント①—  
 ゼオンポリミクス前の道路が周囲と比べ 1m 程低く増水時はここから溢れやすい。

—昭和 28 年多羅尾豪雨—  
 堤防決壊。  
 —昭和 28 年台風 13 号—  
 神社の狛犬と鳥居が流出し、200m ほど下流まで流された。

—石居 1 丁目のウィークポイント②—  
 周囲より堤防が低くなっており増水時には、大戸川の水が溢れやすく、ここから浸水しやすい。

—昭和 40 年水害—  
 昭和 40 年にも同じ場所が、約 80m ほど弓状に堤防が削られた。森 1 丁目の堤防では、ここが最も水の力がかかる場所だとされる。(森 1 丁目 M さんより聞き取り)

—石居 1 丁目のウィークポイント③—  
 小水路が途中で開渠から暗渠に切り替わる。→倒木が詰まり溢水する可能性がある。

—昭和 28 年台風 13 号—  
 当時 17 歳であった F さんが学校を早退し、枝地先の T さん宅から M さん宅まで瀬田川の和船で救助に向かった。

—石居 1 丁目のウィークポイント④—  
 排水管に 1m ほど土砂が詰まっているため土砂崩れにより道路が埋まってしまう可能性がある。→石居から稲津方向へ通行できなくなり、孤立してしまう危険性がある。

—地域特性—  
 石居 2 丁目の農地は、梅雨の時期にしばしば最大 1.2m 程度、数時間浸水する。

—昭和 28 年台風 13 号—  
 石居 2 丁目の田地が水深 2.0m~3.0m 程度浸水し、また 40~50cm 程度の土砂も堆積した。

—昭和 28 年台風 13 号—  
 合流点より 70~80m ほど堤防決壊。またその上流 10m 程堤防決壊。

—昭和 28 年台風 13 号—  
**【水害対応・水防活動】**  
 ・朝方未明に、石居の住民による堤防の警戒が行われ、当時 17 歳であった F さんも招集されたが、既然大戸川の水位が増水して危険であったため、何も出来ずに帰宅した。その後、堤防が決壊した。  
 ・石居集落には被害がなかった為、住民は避難しなかった。  
 ・昭和 28 年当時消防団は存在していたが、現在ほど活発的ではなく、水防活動は行っていなかった。  
 ・台風 13 号による水害をきっかけとし、水防団としての水防活動が始まった。  
**【復旧活動】**  
 ・森 1 丁目堤防決壊箇所の仮閉鎖・仮復旧は田上地区全体から人夫を招集して行った。  
 ・仮復旧の際は、大戸川の水が流入する中に入り、かけやでコア板を当て、杭を埋め込んだ。難工事であったため、復旧までに半月かかった。  
 ・流出土砂の復旧活動は、下田上村 9ヶ村の連携によって行われていた。

—昭和 28 年多羅尾豪雨—  
 上流の堂村橋 (当時は木橋) が流出し、石居橋に引っかかり水を堰きとめたため、耐えられなくなった石居橋も流出した。

—昭和 28 年多羅尾豪雨—  
 石居より下流の稲津の稲津橋 (当時は木橋) も流出し、橋脚のみが残った。

—昭和 57 年水害—  
 石居橋が流出した。



—地域特性—  
 古川は付近で唯一の大戸川への排水路でもあり、大戸川左岸側の農地に降った雨が集まってくる。→降水による大戸川が増水時は排水不良を引き起こし、バックウォーターによる浸水被害が発生する。

—昭和 28 年台風 13 号—  
 古川筋に多量の水が流れ込んだ影響により、古川沿岸の田地が崩れ、削られた。

—昭和 28 年台風 13 号—  
 流出土砂の復旧活動は、当時まだ重機もなかった為、大戸川右岸堤防沿いに線路を引き、手押しトラックで人力で土砂の運び出しを行った。また、業者による土砂搬出後にもニコ (泥が固まったもの) が農地に残されたため、石居の方が自ら撤去を行った。農地の復旧には約半年の時間を要した。